



はじめに

当院の新生児医療の歴史は古く、1963年に未熟児センターを開設し、1974年に新生児集中治療室(NICU)を設置しました。母乳育児を推進し1991年に先進国で初めて、「赤ちゃんにやさしい病院」(Baby Friendly Hospital: BFH)に認定されています。2005年からは母体・胎児部門(産科)とともに岡山県の総合周産期母子医療センターに認定されています。

前回のザ・ジャーナル(2020.3, Vol.14, No.4)直後に、新型コロナウイルスの流行があり、当周産期センターも大きな影響・打撃を受けました。親子関係を育むべき周産期センターにおける厳しい面会制限は、赤ちゃんとその家族だけでなく、医療従事者にとっても精神的・肉体的ストレスが大きな時間でした。しかしその間も、ICTの理解と協力を得て5B

病棟への両親の入室面会禁止という異常事態だけは回避できました。またテレビ電話を用いたオンライン面会を導入し、少しでも家族の時間を確保する努力をつづけました。

加速度的にすすむ少子化、迫りくる働き方改革のために、周産期センターの医療従事者には極寒の時期がつづきます。しかし、早産率、低出生体重児率は低下せず、先天異常児も減少しない現在は、逆に入院が必要な赤ちゃんをいかに元気に養育できるかの重要性が高まっている時代ともいえます。2023年にはGCU加算(新生児治療回復室入院医療管理料)を取得し、また5B病棟が日本初の「赤ちゃんにやさしいNICU」(Baby Friendly NICU: BFNICU)に認定され、より質の高い医療と看護を提供できる体制づくりをすすめています。

5B病棟(新生児センター)

関係各科との連携のもと新生児のすべての疾患を扱う病棟で、入院患者さんのほとんどが出生直後の赤ちゃんです。新生児診療を専門とする小児科医(新生児科医)が小児科専攻医とともに、新生児期に発症する特異的な疾患や周産期特有の問題などの解決にあたります。昨今の急激な出生数減少に合わせ、2023年10月よりNICU(18床)/GCU(12床)とし、より濃厚な看護を提供していく体制に変更しました。早産・低出生体重児、とくに在胎28週未満の超早産児、出生体重1000g未満の超低出生体重児は出生後の合併症も多く、入院期間は3か月以上に及びます。また多胎(双胎や品胎)では約半数が早産になるため、NICUに入院することが多く退院後の育児環境調整が重要になります。

(意外かもしれませんが)NICUに入院する赤ちゃんの約半数は正常産児です。胎児から新生児への環境変化に対応できない場合、先天的な異常のために出生後の呼吸、循環、哺乳、排尿、排便などに問題を生じる場合など、新生児の総合内科として関連各部門(小児外科、脳神経外科、眼科、形成外科、岡山大学病院心臓血管外科など)と連携

して診療にあたります。他院で出生後に異常がみられる場合にはドクターカーで出動して搬送します(60-80件/年)。また周産期医療においても遺伝医療の進歩が著しく遺伝カウンセリングの充実が急務でしたが、福嶋が臨床遺伝専門医を取得し診療体制を強化しています。

5B病棟は、すべての患者さんがご家庭での生活を安心して始めることができるように「新生児の総合病院」としての機能を有しています。院内ではSW, CE, PT, 薬剤師とも密に連携して多職種カンファレンスを頻繁に行い、退院までには行政やクリニックなどとの院外連携の充実をはかっています。



胎児診断・プレネイタルビジット

近年、比重が高くなってきているのは出生前診断症例の診療です。胎児エコーで異常が認められ、精査(羊水染色体検査や胎児MRIなど)により出生前診断されるケースが増加しています。胎児治療、出生直後からの集中治療・外科治療などを産科や小児外科などとともに綿密に計画し、家族に

出生前のInformed consentを実践しています。絶対的予後不良な疾患の場合、出生後の大切な時間をどこでどのように家族と一緒に過ごすかなどを相談していくことも我々の重要な仕事です。

産科病棟(6A)

異常分娩(帝王切開も異常分娩になります)での出生時の立ち会いや、産科病棟の赤ちゃん(いわゆる正常新生児)や在胎35~36週の後期早産児の退院までの管理、授乳中

のお母さんへの薬剤投与についての相談にのるのも我々の仕事です。

母乳育児・ファミリーセンタードケア(FCC)

母乳育児は、NICU入院中の赤ちゃんを含むすべての赤ちゃんの健康とよりよい発達のためにとても大切です。当院では、赤ちゃんがNICUに入院中する場合でも、お母さんが母乳育児を開始して継続できるように産科と連携して支援しています。当院では出生体重1000g未満の超低出生体重児の退院時の母乳育児率は7割を超えており、世界でも例をみないほど高率です。NICUに入院中の赤ちゃんのために何か月も母乳を搾って届けてくださるお母さんに感謝するとともに、母乳育児が継続できるように包括的に支援する目的で、毎週「ママサポート回診」を行っています。

近年、周産期医療の世界ではFCCの重要性が注目されています。家族が医療ケアの提供者となることで早産児の長期予後が改善するといった報告



もみられるようになり、赤ちゃんの予後を最優先すべき医師としても、家族を中心に、看護師、臨床心理士など他職種と協働してFCCを積極的に取り入れるべき時代になっています。NICUでは、入院中から家族みんなで赤ちゃんを育む時間を大切にしたいと考え、2005年より両親の24時間面会、2007祖父母・きょうだい面会を実践しています。約3年間(コロナ禍)の面会制限を経て、5月8日より24時間面会、祖父母・きょうだい面会を再開しています。



外来

主にNICUを退院した赤ちゃんのフォローアップです。極低出生体重児(<1500g)のみならず、後期早産児(33~36週)の予後にも注目が集まってきており、NICUを退院された赤ちゃんの発育・発達フォローアップは、患者さん・ご家族のためにも、そして予後調査のためにも非常に重要な仕事になります。フォローアップ体制の充実が必要であり、神経発達症のための専門外来も開設しています。とくに極低出生

体重児では、神経学的後障害、慢性肺疾患、視力障害、低身長などの身体的問題や、自閉スペクトラム症、注意欠如・多動症、学習障害などの神経発達症の頻度が高いことが知られています。

また近年、増加が注目されている医療的ケア児の70-80%はNICU入院歴がある子どもたちであり、訪問診療医、訪問看護ステーションと連携して診療を行っています。

研修・女性医師・教育

小児科専攻医は、基幹病院である岡山大学病院の小児科専攻医プログラムに準じて研修を行います。新生児科研修では最終的には新生児蘇生、気管挿管、PICC留置などを経験したうえで、NICU当直を担当できるようになるまで実践を積みまます。

当院は周産期・新生児医学会認定の基幹施設であり、専攻医修了後は周産期専門医(新生児)取得を前提とした高度な研修が可能です。

日本周産期・新生児医学会が主導する、新生児蘇生法普及事業(NCPR)の一翼も担っています。適切な新生児蘇生を行うことができるようにNCPR講習会を年2回開催し

ています。また産科・小児外科と協力して、開業産院、総合病院産科の先生、看護スタッフとの勉強会を開催しています(ペリネイタルミーティングOKAYAMA)。

学生教育にも力を注いでおり、当院附属の助産科の講義はもちろんのこと、岡山大学医学部の学外実習向けの「低出生体重児・新生児コース」をプログラムして多くの学生を教育しています。また同保健学科の「妊娠中からの母子支援」即戦力育成プログラムにおいても、助産師免許や看護師免許を取得しながら結婚、妊娠、子育てのため家庭に入った女性の復職支援に協力しています。

研究

竹内、玉井を中心に臨床研究および疫学研究に熱心に取り組む、岡山大学小児科、小児神経科、疫学・衛生学、香川大学小児科と連携することで多くの研究を発表、論文化しています。



スタッフ紹介

若手女性医師のロールモデルとなる、結婚・出産・育児とNICU勤務を両立している4人の女性新生児科医師が在籍しています。



【診療部長（周産期）】

- ・影山 操（平成6年卒）
小児科専門医、周産期専門医（新生児）・指導医、岡山大学臨床教授

【医長】

- ・中村 信（平成5年卒）
小児科専門医、周産期専門医（新生児）・指導医

【医師】

- ・竹内 章人（平成15年卒）
小児神経科兼任 小児科専門医、周産期専門医（新生児）・指導医、小児神経専門医、岡山大学非常勤講師、
- ・玉井 圭（平成18年卒）
小児科専門医、周産期専門医（新生児）・指導医、NCPRインストラクター 『ビールとバスケットが大好き、大谷くんの行き先が気になる～』
- ・福嶋 ゆう（平成21年卒）
小児科専門医、周産期専門医（新生児）、臨床遺伝専門医 『第2子育児休暇中、新生児も遺伝もスペシャリストを目指します!』

- ・神谷 雄作（平成24年卒）
小児科専門医、周産期専門医（新生児）、NCPRインストラクター 『家では私<<妻・娘』

【レジデント】

- ・服部 真理子（平成23年卒）
小児科専門医 『昼食とらないと働けません』
- ・大山 麻美（平成26年卒）
小児科専門医、NCPRインストラクター 『良き妻・母です、身内に弁護士がいるので困れば相談してください』
- ・村上 美智子（平成29年卒）
小児科専門医、NCPRインストラクター 『妻も母もがんばってます。今一番の力を入れているのは重症患者さんです!』

【小児科専攻医】

- ・清水 雄一（令和2年卒）
『九州で焼酎を学んできました。おすすめは赤兎馬です』

【心理士】

- ・松田 良子（公認心理師・臨床心理士）
『モットーは「場にいる Being」』